

桂林莊雜詠諸生示す(その四)  
 広瀬淡窓

長鋏ちやうきやう帰かえりなん  
 故国ここくの春はる  
 時時じじつ務つとめて  
 松はろうと簡編かんぺんの塵ちり

君看きみみよ  
 白首はくしゆ無名むめいの者もの  
 曾かつて是これ  
 経けいを談だんじて  
 席せき奪うばひし人ひと

【作者】広瀬淡窓(一七八二〜一八五六年)(天明二年〜安政三年)江戸後期の儒学者。初めの名は簡、後に建と改めた。豊後日田の生まれ。二十  
 六歳の時、日田に塾舎桂林莊をつくり子弟を教育、三十六歳の時、塾生の増加により堀田村に移り咸宜園(かんぎえん)と言った。門人四  
 千余人の中から多方面に人材を輩出、幕府は育英の功を賞し土籍に列し、苗字帯刀を許した。安政三年没、年七十四歳。  
 著書に「約言」「迂言」「義府」「析玄」「遠思楼詩鈔」「淡窓詩話」などがある。

【語釈】\*長鋏…長劍のこと。「戦国策」の故事のことば。 \*時時…常に。 \*簡編…書物のこと。 \*白首…白髪と同義。 \*談経奪席…  
 経書(学問)にずばぬけている精進している人のこと。

【通釈】塾での学業を修めて、さあ帰ろう、故郷の春へ。だが、安閑としてはいられない。常に書物を繙(ひもとく)いて勉学に努めなければならない。  
 見てごらん、いま、白髪になって名も無く埋もれている者を。この男だつて、昔は学問にすぐれていると評判だつただよ。そのように研鑽おつ  
 づけなければ、ついには無名の田舎おやじで終わってしまうことを忘れてはならない。